

第117回 『ポケットいっぱい秘密』の ミステリアスな秘密

大学卒業を前にした昭和48年師走の頃だったでしょうか、文学部1年のときに隣のクラスに在籍していた松任谷正隆君が「キャラメル・ママ」という細野晴臣率いるバンドのメンバーに名を連ねているという情報を入力、彼はすでに吉田拓郎のレコーディングなどに参加していましたが、

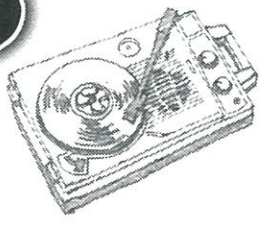
(私の記憶では)在学中に「アイスパーク」という名のアコースティック系バンドでも活躍していました。歌謡界では、アグネス・チャンが『小さな恋の物語』でシングル盤トップの座を初めて射止めた頃のことです。アグネスはデビュー曲『ひなげしの花』からヒットを重ねてい

ましたが、作曲家が固定されず、森田公一↓加藤和彦↓平尾昌晃と交代、第4弾用に再度森田が登用され、『小さな恋』が誕生しました。その後も作詞家と作曲家は一定せず、第6弾シングルは作詞・松本隆&作曲・穂口雄右という新進コンビによる『ポケットいっぱい秘密』でした。昭和49年6月発売のシング

ルでしたが、原曲はその3か月前に発売されたアルバム収録曲で、バックで演奏していたのが前出の「キ

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで



堀井六郎 浦松本 絵

キャラメル・ママ』でした。シングル・バージョンよりカントリー色の濃い編曲になっていて、アグネスの音楽的ルーツの一つでもあるカーペンターズ版『ジャンバラヤ』の雰囲気

が漂っています。リスクを顧みないこうした新人の登用は、アグネス所属のナベプロ担当ディレクターの戦略でした。慧眼といつてよく、アグネスだけでなく、穂口雄右、松本隆といった才能ある若手作家を飛躍させ、歌謡界に貢献します。特に、『ポケットいっぱい秘密』が歌謡曲の作詞家として実質的なデビュー作となった松本隆の抜擢は、その後の昭和歌謡の世界を大きく広げることになりました(前年にチューリップ『夏色のおもいで』を作詞)。

売れっ子になる前だったので時間的にも余裕があったのか、松本はこの作品で言葉遊びを企みました。後年、インタビュなどで松本自ら打ち明けていますが、『ポケットいっぱい秘密』の途中の歌詞に注目すると――。



あなた 草のうえ
ぐっすり眠ってた
寝顔やさしくて
「好きよ」ってさきやいたの

行頭の文字に「アグネス」が隠されている、という仕掛けで、本人曰く、『ポケットいっぱい秘密』の秘密、ということになります。

文章に別の意味を含ませる言葉遊びですが、子供の頃に読んだジュニア向け推理小説にあったのは、手紙の文章の行頭文字を拾い読むと、「たすけてください」となる等々、江戸以前から存在した「折句」という遊びです。

曲名は、当時ベストセラーを続けていた落合恵子の「スプーン一杯の幸せ」シリーズからの発想かと思いますが、松本は、日

本語ロックをめざしていたバンド「はっぴいえんど」時代から『はいからはくち』(ハイカラ白痴と肺から吐く血のダブルミーニング)など、歌詞にさまざま仕掛けを施しています。初期の松本作品は油断できません。